

二代目市川團十郎の日記詳解 第四回

（享保十九（一七三四）年四月三日～五月五日）

ビュールク・トールヴエ*

【要旨】本稿では、享保期江戸歌舞伎界で活躍した二代目市川團十郎（元禄元（一六八八）年～宝暦八（一七五八）年）の日記を詳しく読解する。文献が少ない近世中期における貴重な資料でありながら、これまで分析されることがなかった二代目團十郎の日記には、舞台制作の詳細はもとより歌舞伎役者としての日常生活についても縷々綴られている。これらを読み解くことで、当時の歌舞伎役者のありのままの姿を、また当時歌舞伎の舞台がどのように制作されたかを知ることができ、ひいては歌舞伎界の転換期とされる享保期江戸歌舞伎の実態の解明につながるであろう。

キーワード…二代目市川團十郎、江戸歌舞伎、享保

はじめに

巻第二号

享保期江戸歌舞伎界で活躍した二代目市川團十郎（元禄元（一六八八）年～宝暦八（一七五八）年）の残された日記写本に注を付し、解説する。

日記写本の成立や特徴、注釈書の概要、本稿の意図については「第一回」に詳述した。これまでの各稿の掲載は以下のとおり。

第一回（享保十八（一七三三）年十二月～同十九（一七三四）年一月）『埼玉大学紀要 教養学部』第五二

第二回（享保十九年二月十日～三十日）『埼玉大学紀要 教養学部』第五三巻第一号）
第三回（享保十九年三月三日～十九日）『埼玉大学紀要 教養学部』第五三巻第二号）

凡 例

一、日記原文は『資料集成二世市川團十郎』（和泉書店、一九八八年刊）による。本稿では日記原文はゴシック体で、

*ビュールク・トールヴエ・ヨハンナ、埼玉大学大学院人文社会科学研究所・准教授

注はハポイントで記した。

二、日記原文冒頭の記号▽○●▲▼は写本を示す。

写本一覧

▽「老のたのしみ」

○「柿表紙」

●「栢筵日記」

△「病中日記」

▼「市川團十郎日記発句集」

三、「老のたのしみ」「柿表紙」「栢筵日記」には注釈書がある。各注釈書からの引用は、引用文を「」で、書名を略号へ～で示した。

注釈書一覧

「老のたのしみ」注釈書

岩本活東子注「老のたのしみ抄」『燕石十種』中央公論社、一九八〇年刊）〈老岩〉

内藤耻叟・小宮山綏介注「老の楽」『温知叢書』博文館、明治二十四（一八九一）年刊）〈老内〉

博文館編輯局校訂「老の楽」『校訂俳優全集』博文館、明治三十四（一九〇一）年刊）〈老博〉

郡司正勝註「老のたのしみ抄」『近世芸道論』日本思想

体系（六一）、岩波書店、一九七二年刊）〈老郡〉

「柿表紙」注釈書

伊原青々園注「柿表紙」『栢筵遺筆集』大正六（一九一七）年写、早稲田大学演劇博物館蔵）〈柿〉

「栢筵日記」注釈書

伊原青々園注「栢筵日記」『栢筵遺筆集』大正六（一九一七）年写、早稲田大学演劇博物館蔵）〈栢〉

四、引用文の約物は省略した。

五、出典記載のない役者評判記は『歌舞伎評判記集成』（岩波書店、一九七二～一九七七年刊）に収録されている。

六、出典記載のない注は『日本大百科全書』『日本国語大辞典』『日本歴史地名大系』『仏教語大辞典』『日本人名辞典』『世界文学大事典』『歌舞伎事典』を参照した。

本稿は独立行政法人日本学術振興会平成三十年度科学研究費（基盤研究C、課題番号18K00312）の交付を受けて制作された。

享保十九（一七三四）年四月

○三日 明六ツ時母人伯母御太七^三甲州身延山^四へ旅立 朝
少シ雨フリ又止発足ノ時雨晴キゲンヨクタシ^五 其夜ハ
戸塚泊リ 二日小田原泊^七 三日首尾能箱根御関所被越
候

一 母人 二代目團十郎の母お戌（第一回）正月六日参照。

二 伯母御 二代目團十郎の伯母。深川出身、歌舞伎劇場の川原崎座関係者
か（第二回）二月十九日参照。

三 太七 「土佐屋太七」〈柿〉。葺屋町の芝居茶屋土佐屋主人。二代目團十郎は太七の新居完成を祝い（○享保十九年八月八日）、重病にかかった太七を見舞うなど（○同年十月十四日）太七と親しく関係した。太七は二代目團十郎に「御方様」（未詳、大名の奥方か）からの手紙を手渡すことから（△元文元（一七三六）年十二月十日）、土佐屋は規模の大きな茶屋であったか。

四 身延山 山梨県身延町にある標高一一五三メートルの山。また、日蓮宗総本山久遠寺の奥の院があることから久遠寺を指す。久遠寺は文永十一（一二七四）年、日蓮によって建立、「菩提梯」といわれる約三百段の石段、祖師堂、大本堂などある。

五 タシ 「出力 立力」〈柿〉

六 戸塚 神奈川県横浜市内西部、東海道の宿場町。物資運搬のための馬を置く「伝馬宿」として栄えた。

七 小田原 神奈川県南西部の城下町で、東海道の宿場町。戦国時代、北条氏の本拠地となり、以後栄えた。

八 箱根御関所 神奈川県箱根町、箱根山芦ノ湖畔に設けられた東海道の関所。小田原藩が警衛し、全国でもっとも厳しい関所といわれた。

三月興行「繁扇隅田川」（市村座）が当たらず（第二回）三月十九日参照）早々に公演を切りあげた二代目團十郎は、母お戌、伯母、芝居茶屋主人土佐屋太七らとともに山梨・身延山の久遠寺へ向かった。

二代目團十郎は旅行を好んだ。享保十八（一七三三）年十月、妻お才、三代目團十郎、娘お犬、俳人二代目深川湖十らとともに箱根の温泉を巡り（俳諧紀行『犬新山家』深川湖十編、享保十八年刊）、また延享三（一七五〇）年六月には俳人伊十や社鼠らとともに八王寺、高尾に旅した（兎亭竹敬編句集『高尾土産』延享三年刊）。

近世初期、身延山参詣は和歌や俳諧の格好の題材としてしばしば吟詠された（元政著歌集『身延のみちの記』万治二（一六五九）年成立、貞佐句集『身延詣』享保六（一二七二）年刊など）。このときの二代目團十郎の身延山行きも、あるいは吟行が目的だったか。

○八日 身延山着被申候

○九日 本山参詣

○十日 七面山巡礼アリ

○十一日 身延下山イヅレモ天気快晴

○廿二日 無恙帰宅也

- 一 本山 山梨県身延町にある日蓮宗総本山久遠寺のこと。文永十一(一二七四)年、日蓮が結んだ草庵にはじまり、弘安四(一二八二)年、領主波木井実長が伽藍を創建、翌年日蓮が没するとその遺骨を納めた。武田氏、豊臣氏、徳川氏などの保護をうけ、隆盛期には支院百六十を数えた。
- 二 七面山 山梨県南西部にある標高一九八九メートルの山。身延山の南西に位置し、山頂には七面大明神を祀る七面山本社敬慎院がある。
- 三 身延下山 身延山を降りること、あるいは身延町の下山宿しも延しゆくか。下山宿は室町時代、身延山の寺社の造営や改修を行う大工らが投宿、江戸時代には身延山参拝客の宿場となった。

このとき二代目團十郎は日蓮宗の寺院を巡るが、山村座に提出した請状によれば團十郎家の宗派は「宗旨之儀ハ代々より浄土宗」(正徳三(一七一三)年七月二十三日、早稲田大学演劇博物館蔵)としている。さらに團十郎家がしばしば参詣した成田山新勝寺は真言宗であり、團十郎家は宗派にとらわれずさまざまな寺社に参詣していた。

江戸時代、身延山七面山にはいい伝えがあった。ある日身延山で説法をする日蓮の前に見慣れぬ女性がいた。日蓮がこの女性に水を一滴与えたとたちまち龍の姿に変身し「私は七面山に住む者。身延山と法華経を修める方々を守護する」と言い残すと七面山の方角に飛び去ったという。この伝説が謡曲「現代七面」や「身延」、説教浄瑠璃「身延山七面天女」などに取り上げられ流布、身延山と七面山に多くの人が訪れるようになった。

元禄宝永期以降、身延山信仰が篤くなると、人々は久遠寺や敬慎院に高座石や石灯籠などを寄進するようになった(望月真澄著「江戸庶民の身延山信仰」『印度學佛教學研究』五二(二二)、二〇〇四年刊)。

江戸後期になると身延山参詣の道中の様子が読本や合巻の題材となり(十返舎一九著『甲州鯉沢報讐』文化四二(一八〇七)年刊、仮名垣魯文著『甲州道中膝栗毛』文政四(一八二二)年刊)、また道中の風景が描かれた(葛飾北斎作「身延川裏不二」(富嶽三十六景)天保五(一八三四)年刊、図一)。

図一 「身延川裏不二」 東京国立博物館蔵



享保十九年五月

○朔日 荷葉子被参一日閑話

一 荷葉子 「大津氏」(柿)。二代目團十郎は荷葉子について織田信長の家来の子孫「大津左近」(▽五月朔日、一三六ページ参照)というが、未詳。大津家は宇多天皇(仁和三(八六七)年)寛平九(八九七)年の四皇子の子孫で、源姓を与えられて臣籍に入った宇多源氏に由来する佐々木家の分家。のち三河国渥美郡大津村に移り、永祿頃から徳川家康に仕えた(寛政重修諸家府』第十八巻)。

二代目團十郎のもとに荷葉子が訪れ歓談した。以降、荷葉子との話の内容が続く。

○禅宗江湖ノコト漢土ニテ江西湖南ト云所右ニツノ西南
 禅林有^五 是二名僧アリテ 所化皆湖南へ行江西へ行テ
 学問セシヨリ江湖ニツクノ名アリ 日本ニテ曹洞宗計^六
 リ此名ヲ用ユ

- 一 江湖 厳密には中国揚子江と洞庭湖だが、ここでは「世の中」の意。つまり、「禅宗江湖」とは「禅宗の世界、禅界」を意味する。
- 二 漢土 中国の別称。
- 三 江西 中国の省の一つ。揚子江中流域の南方に位置し、陽湖の集水区域

で四方を丘陵性の山に囲まれる。

四 湖南 中国の省の一つ。江西の東に位置する。洞庭湖南方に広がり、湘江が南北に流れる。

五 禅林 心を一点に集中し、雑念を退け、絶対の境地に達するための瞑想（禅定）を修行する寺。古くは寺の呼称。また、その寺に住む僧。

六 曹洞宗 禅宗の一宗派。中国の禅宗は五世紀後半、インドから渡来した菩提達磨を初祖とする。日本へは鎌倉時代、道元によって伝来。

揚子江と洞庭湖にある禅を修行する二つの地域について話していることから、荷葉子は禅僧か。

○丹霞^一木仏^二ヤケハ院主^三眉鬚^四ダラクスト云コト ハンニヤ^五ヒホウノモノハビシユダラクス 丹霞ハ院主ニハンニヤヲシメス 院主ノ迷ハハンニヤヲヒホウニヒトシ 予ハ不^レ済重ネテ可問

一 丹霞 中国唐時代の禅師丹霞天然、七三九年生、八二四年没（贊寧編『大宋高僧伝』卷十一「唐南陽丹霞山天然伝」、九八八年成立、中華書局、一九八七年刊）。

二 院主 『大宋高僧伝』では「人」とある。

三 眉鬚^{ひしめだらく}ダラクス 眉鬚^{ひしめだらく}墮落。みだりに法を説く者は、その罪により眉や鬚が脱落する（中川洪庵編『禅語字彙』森江書店、一九六八年刊）。

四 ハンニヤ 般若。仏教において、八正道、四諦、六波羅蜜などを修めて

顕現する真実の智慧。分析的判断能力から出発して、これを超え、存在すべてを全体的に一瞬のうちに把握する直観知のこと。悟りの智慧。

五 ヒホウ 庇保。かばい守ること。

ある寒い日、禅師丹霞は木仏を焼いて暖をとった。智慧の象徴である木仏を敬う院主がこの行為を咎めると、説法の乱用のために眉や髭が抜け落ちたという。丹霞の行動は仏像など「もの」に囚われすぎた唐時代の仏教を批判したものとして解釈されることが多い（松原泰道著『公安夜話』すずき出版、一九九〇年刊）。わかりにくい話であるため、改めて質問したいという二代目團十郎は、その後の五月十日（○）に荷葉子と再会するが、この件に関する記録は残っていない。

▽稲葉家の臣取次役 小波又右衛門と云人異風の物数奇にて石にて武士の像をつくり浅草の地内に立置 今の久米の平内兵衛^三是なり 今是其人の子孫稲葉家になきよし 其頃は智樂院^四とて浅草寺^五も上野^六の末寺^七ならず無本寺^八のよし 其智樂院は又右衛門熟^九こんにて地内^十に是を立 右平内兵衛は又右衛門碁好にて碁を樂する形也とそ

一 稲葉家 江戸時代の大名家。先祖は代々美濃国土岐氏に属し、土岐氏没落後主家を斎藤氏、織田氏とかえ、良通（稲葉一鉄）のとき豊臣秀吉に仕え、美濃郡上八幡城主となった。良通の子貞通は関ヶ原の戦いで東軍に属し、戦後豊後国臼杵に移り（四万石）、同地で十五代続いた。また貞通の妾腹の兄重通の子正成は関ヶ原の戦功により慶長十二（一六〇七）年、美濃で一萬石を賜り、その子正勝は老中を務め寛永九（一六三二）年、相模国小田原で八万五千石を領した。享保八（一七二三）年、正知のとき、山城国淀十萬二千石となり、代々同地を領した。最後の藩主正邦は老中となった。さらに正勝の嫡子正則の三男正員は天和三（一六八三）年、三千石を分与され幕府寄合に列し、天明元（一七八一）年、正明のとき安房国館山で一萬石を領し、五代続いた。

二 小波又右衛門 未詳。

三 久米の平内兵衛 「久米の平内の事諸書に考証あれとも未だ此事を引しせのなし真の異聞なり」（老内）「京伝注に『桜瘦云、此説世ニ伝ルト異也。小波又右衛門之名ヲ匿シテ久米平内兵衛ト称セシ歟。其所以ヲト□ス。惜哉。委ク予ノ東京旧聞ニ載ス』（老郡）。元和二（一六一六）年生、天和三（一六八三）年没とされるが、架空の人物とも。出生名は兵藤長、通称平内兵衛。浪人となって江戸赤坂に道場を開き、夜々辻斬りを行ったが、のちに行いを改め鈴木正三に仁王座禪を学び、浅草金剛寺で専念。罪業消滅を願い、人々が踏み付ける自分を模した石像を彫り、浅草寺に安置。のちに「踏付け」が「文付け」と解され縁結びの神とされ、願掛けに文を納める風習が生じた。浅草寺宝蔵門脇に「久米平内堂」が現存する。

四 智楽院 浅草寺内の伝法院の江戸初期の別称。また戦国江戸前期の僧天海。天文五（一五三六）年生、寛永二十（一六四三）年、一〇八歳で没。比叡山で学び同山復興に尽くし、天台宗中興の祖とされる。徳川家康の

幕政に参画。寛永二（一六二五）年、上野寛永寺をひらく。原始仏教の聖典天海版大蔵経を日本初の版本として計画、死後刊行された。

五 浅草寺 「高安本『浅草寺の寺内』（老郡）高安本とは劇作者高安月郊（明治二（一八六九）年生、昭和十九（一九四四）年没）筆による写本「老の楽しみ」（早稲田大学演劇博物館蔵）を指す（「第一回」「はじめに」参照）。東京・浅草にある聖観音宗の総本山で、山号は金龍山。もと天台宗。推古天皇三六（六二八）年、宮戸川（隅田川下流）の漁で同じ像がたびたび見つかる、これについて相談を受けた土師中知はこの像を観音像とした。浅草寺は、中知がのちに僧となり自宅を寺としたことに始まる。平公雅・源頼朝・徳川家康らが堂塔の建造、寺領の寄進などを行い、江戸屈指の寺として庶民の信仰を集めた。

六 上野 「上野寛永寺の意」（老郡）

七 末寺 本山の支配下にある寺。本寺に付属する寺。

八 無本寺 「本山のない寺」（老郡）。本寺より独立し、末寺のないもの。

九 熟こん 熟懇、または熟願か。いずれも明治以前の用例はない。

十 楽する形 「高安本『たのしめる容』。伊原本『按スル形子』（老郡）伊原本とは歌舞伎研究者伊原青々園（明治三（一八七〇）年生、昭和十六（一九四二）年没）筆による写本の注釈書『栢筵遺筆集』（早稲田大学演劇博物館蔵）を指す（「第一回」「はじめに」参照）。

久米平内兵衛は江戸中期以降、さまざまな作品に登場する。歌舞伎「糸平内強力物語」（寛保元年（一七四一）五月、大坂十蔵座）に登場（『歌舞伎年表』）、また豪傑の男伊達として曲亭馬琴作読本『巷談坡堤庵』（文化五（一八〇八）

年)、鎌倉長谷寺の仁王の申し子として山東京伝作合巻『久米平内剛力物語』(文化六「二八〇九」年刊)にもあらわれる。

さらに明治三十八(一九〇五)年正月新作歌舞伎「糸平内」(宮戸座)も上演され『歌舞伎年表』、その他「糸平内一代記」(明治四十四「一九一一」年上演)や「糸平内と幡随院」(大正十四「一九二五」年上演)など映画九本も制作された(日本映画データベース)。

『久米平内剛力物語』口絵(文化六「二八〇九」年刊、勝川春亭画、図二)には、石像図とともに「ふみをおさむるいわれハ」の記述があり、「文付け」による願掛けの習慣があったことを示している。斎藤長秋著『江戸名所図会』(天保七「二八三六」年刊、図三)には、説明文として平内兵衛が元播磨藩守青山主膳の家来兵藤氏であり、禅学を励み、自身の姿を仁王像に模して石像を作り、墓は駒込海蔵寺にあると記している。



図二『久米平内剛力物語』九州大学附属図書館蔵

図三『江戸名所図会』国会図書館蔵



歌川豊国は、牛の石像から立ち現れる妖術師として「糸平内左衛門長盛」を描いた（『奇術競』文久慶応期頃刊、図四）。名前は「平内左衛門」とあるが、同一の人物であろう。

図四「糸平内左衛門長盛」『奇術競』国会図書館蔵



荷葉子は智楽院に安置された像は碁を打つ姿であるというが、ここに挙げた平内兵衛像はいずれも碁を打ってはいない。石像が設置されたのは僧天海が没する寛永二十（二六四三）年より前と考えられ、あるいは『久米平内剛力物語』口絵が描かれる文化六年までに石像が作り直されたとも考えられるが未詳。

なお、日記原文「稲葉家の臣取次役……碁を楽しむ形

也とそ」の六行は▽「老いの楽しみ」と○「柿表紙」で掲載日が異なる。▽「老の楽しみ」では三月四日「狩野如川……」（第三回）三月四日参照）のあとに配置されているが、○「柿表紙」では五月一日に記載されている。『資料集成二世市川団十郎』では、日記文の文章は▽「老の楽しみ」によるが、掲載日は○「柿表紙」に従っている。なお、▽「老の楽しみ」では三月四日末尾に続く「○三月七日八日庭ノ桜咲揃真盛也……」から五月朔日「○丹霞木仏ヲヤケハ予ハ不レ済重ネテ可問」までの二十七行が欠落している。

○人の心ニヲクリムカヘルト云コトアリ ムカヘトルトハ来ルコトヲ思フコト ヲクルトハ 過去リシコトヲ思フコト 是ミナ寿命ノ毒也

庭前ノ柏樹子^二唔道^三也

ソモサンイン^四モイヅレモ釈語^五ニアラズ 漢土ノ俗語^六也
朱子語類^七ニモアリ 禅ハ語録^八多キ物ナレバ此コトバ
アリ

一人の「人ノ」(柿)

二 庭前ノ柏樹子 無門慧開編『無門関』（一二二八年成立）第三十七則「庭前柏樹子のこと。「庭前柏樹子」の逸話に関する「聴蛙……」については「第三回」三月四日参照のこと。

三 唔道 吾道か。

四 サンイン 三因、三因仏性か。三因仏性とは天台宗が説く、仏になるための因子（仏性）で、正因仏性（すべてのものに具わる真実の理）、了因仏性（理を照らして表す智慧）、縁因仏性（智慧を起こす縁となるすべての善行）の三つ。

五 釈語 經文などを講釈すること。

六 俗語 仏法に関係のない俗人のことば。

七 朱子語類 中国の儒書のひとつ。南宋の黎靖德編、全百四十卷。咸淳七（一二七〇）年成立。朱子の没後、朱子とその門人らとの問答を、理氣、性理、論語、周子書、老莊、漢唐諸子、作文、拾遺など三十五門に分け集録。朱子の思想体系が知られ、經書、性理書や諸子などの解經書の役割も果たす。日本には鎌倉末期に伝来、江戸時代、山崎闇斎の学派が尊重した。

八 語録 宗派の開祖の法話、説法、問答など記録し集成したもの。人格と人格との出会いによる体得に重きをおいた禅宗で生まれ、重視された。美辞麗句を用いることなく、散文で記された。代表的な語録に唐代の『臨濟録』がある。

禅の公安集『無門関』の「庭前の柏樹子」について論じる。
唐の禅僧趙州和尚（七七八年生く八九七年没）は禅の開祖達磨大師の教えを、自分が属した柏林寺の庭にあった柏樹を用いて悟そうとした（西村恵信注釈『無門関』岩

波書店、二〇〇四年刊)。二代目團十郎が記す「人の心ニヲクリムカヘル……」とは荷葉子における「庭前の柏樹子」の解説か。ただ、本来の「庭前の柏樹子」の解釈とは異なっており、あるいは別の禅書からのものか。

『無門関』は、著者無門慧開の元で修業した日本の禅僧無本覺心(承元元〔一二〇七〕年生、永仁六〔一二九八〕年没)によつて建長六(一二五四)年日本に伝えられた。江戸初期には、『無門関抄』(寛永十四〔一六三七〕年刊)や『鼈頭評註無門関』(寛文二〔一六六二〕年刊)など禅の注釈書や解説書が数多く出版され、広く読まれた。

▽京 言水 公家衆へ召されて当座^二

めされてもわれ室咲のかしけ哉^四

言水

▽不角^五 又公家衆へ召されて

折られてはけく露をかぬ野菊かな

不角

○其角^七 貴人へ召サレテ

御秘蔵^八ニ墨ヲ摺ラセテ梅見哉^九

其角

器量違シ者也ト 荷葉子其角ヲ称美也 春寒秋暑老ケン
ケンイ^{十一}

一言水「池田言水。俳人。享保七年、七十三歳で没」(老郡)。池田言水、俳人、慶安三(一六五〇)年生、享保七(一七二二)年没。別号紫藤軒、洛下堂その他。十六歳で出家し俳諧に専念、延宝四(一六七六)年頃、談林俳諧全盛期の江戸に出て、芭蕉、幽山、才麿らと交流しつつ多くの撰集を編纂、談林から蕉風への転換期における先駆的俳人に数えられた。編著に『東日記』『新撰都曲』『初心もと柏』など。

二 当座「即吟。即興で詠む歌俳」(老郡)

三室咲 部屋の中で花を咲かせること。花を温室の中で咲かせること。また、その花。季・冬。

四 かしけ 悴ける。(一) 生気がなくなり、衰える。(二) 姿や顔つきがやせ衰える。(三) 草木や花が、生気を失ってしおれる。

五 けく「二字不明」(老郡)

六 不角「不ト門の俳人。本屋」(老郡)。立羽不角、俳人、寛文二(一六六二)年生、宝暦三(一七五三)年没。岡村不トに学び、一時沾徳派とならび江戸の俳壇に重きをなした。編著に『二葉の松』『木曾の麻衣』など。

七 其角「榎本其角。俳人、のちに宝井氏。俳人。芭蕉の高弟。宝永四年、四十七歳で没」(老郡)。俳人、寛文元(一六六二)年生、宝永四(一七〇七)年没。蕉門十哲のひとり。延宝末期、芭蕉とともに俳諧の革新に努め、貞享元禄期にかけて蕉風の樹立、展開に寄与。芭蕉没後、軽妙洒脱な俳諧の一派、江戸座を生んだ。主著に『虚栗』『句兄弟』『枯尾花』など。

八 御秘蔵「(一) 大切に、しまっておく意の尊敬語。(二) 特定の目下のものをかわいがり、大事にすること。また、その対象。とくに貴人の寵愛する妻、妾、小姓など。秘蔵。(三) 女陰の異称。

九 梅 奈良時代に渡来、漢詩集『懷風藻』(天平勝宝三〔七五二〕年成立)に初めて取り上げられて以降、多くの和歌や漢詩の題材となった。九州・

大宰府へ流される菅原道真が延喜元（九〇一）年、庭の梅との惜別の歌を詠んで以後、梅は天満宮や天神様のシンボルとされ、現在に続く。季・春。春寒秋暑 春寒とは立春後の寒さ。春になってぶり返す寒さのこと、季・秋。秋暑とは立秋を過ぎてても、なお暑さを感じる残暑をいう、季・秋。十一 老ケンケンイ 老健健胃。老健とは老いてなお身体の健やかなこと。老いても元気なさま。また、老熟してなお氣力の盛んなさま。健胃とは、胃の働きがさかんなこと。丈夫な胃。健康な胃。

言水は公家に招かれるも、部屋の中でしおれた花のようだという句を詠む。不角の句は折れた野菊のように顔を上げることはないという。それに対して其角は梅見を題材に含みのある句を詠む。

梅は『万葉集』において萩は次いで多く詠まれた花（百十八首）。藤原朝臣「妹が家に咲きたる花の梅の花実にし成りなばかもかくもせむ」（『万葉集』三九九）のように、梅に実がならないことから実らぬ恋に例える歌が多く、また猿丸大夫「屋戸ちかく梅の花うゑじあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり」（『古今和歌集』三四）や藤原兼輔「梅の花立ちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみぬる」（『古今和歌集』三五）など男女関係をはのめかす歌もある。荷葉子はここで、二重に解釈

できる梅の句を詠んだ其角を賞讃している。二代目團十郎はそのような荷葉子に老いてもなお盛んなさまを見ている。

なお〇「柿表紙」ではこの三句が並記されているが、▽「老の樂しみ」では「〇其角……老ケンケンイ」が省略されている。孫に贈るために五代目團十郎から写筆を依頼された山東京伝は、好色な解釈が可能なこの句をあえて省略したか。

▽荷葉子六代程先の先祖は子供の歌にうたふおはり左近の乙娘_二といふ 其左近也 大津左近_三と云て信長公につかへし者也と語られき

一 おはり左近 尾張左近か、未詳。

二 乙娘 長女に対して次女以下の娘。

三 大津左近 未詳。大津家については既出（〇五月朔日、二九ページ参照）

荷葉子の先祖は織田信長に仕えた大津左近で、その娘が歌にうたわれているというが、仔細は不明。

○湖萍ヨリ聖像一幅モラフ 使山寿 端午六日迄芽出度

カケ置

一 湖萍 初代深川湖十（第二回）二月二十三日参照。

二 山寿 未詳。初代深川湖十の門弟、または使用人か。

三 端午 五節供のひとつで、陰暦五月五日の男子の節供。邪気を払うために軒に菖蒲や蓬をさし、粽や柏餅を食す。江戸時代以降、男児のある家では鯉のぼりを立て、甲冑、刀、武者人形などを飾って将来を祝う。あやめの節供。重五。端陽。季・夏。

俳人初代深川湖十から聖像が描かれた掛物をもらい受けた。二代目團十郎はこれを、端午の節供が明ける五月六日まで掛けた。室町期以降、厄除けの神鍾馗の信仰が中国から渡り、端午の節供に鍾馗図を貼り出して邪鬼悪病除けにするようになった。初代團十郎が鍾馗を演じたこともあり（「参會名護屋」中村座、元禄十〔一六九七〕年正月）、この掛物の聖像とは鍾馗だったか。

○五日 初日大入評判ヨシ

今年ホト、キス

山ノ手ノ人ウラヤマシホト、キス

又

是ハマタナカヌコトカナホト、ギス

一 初日 舞台の初日のこと。

二 ホトトギス 和歌に詠まれる代表的な鳥。四月は山に在るが、五月になると人里に飛来して梢で声高く鳴く。「いつの間に五月来ぬらむあしひきの山時鳥今ぞ鳴くなる」（詠み人知らず『古今和歌集』夏、一四〇）などと詠まれ、飛来を待ち、その初声を聞くのが大きな関心事となった。またその声を聞くと物思いや懐旧の情がかき立てられ、また場所を定めず鳴くので、多情の鳥として恨まれもした。鳴き声が「しでのたをさ」（「死出の田長」など）と聞こえることから、「死出の山越えて来つらむ時鳥恋しき人の上語らなむ」（『拾遺和歌集』哀傷・伊勢）など、冥土に通う鳥ともされた。『源氏物語』『花散里』は、このようなホトトギスを物語の主題にした。季・夏。

三 山ノ手 （一）山の方。山に近い方。山をひかえた地域。（二）江戸で、やや高台にある住宅地。麹町、四谷、牛込、赤坂、小石川、本郷などをいい、大名、旗本などの武家屋敷と寺院で占められ、町家は稀だった。

四 ナカヌ 織田信長、豊臣秀吉、徳川家康が「鳴かぬホトトギス」の句を詠み、それぞれの性格を表すというが、事実かは未詳。

五月公演「八棟菖源氏」（市村座）の初日が大入りだったというが、その後「手の字をつくされたれどあたらず」（役者評判記『役者初子読』享保二十〔一七三五〕年正月刊）

と、大入りは長く続かなかった。

続いてホトトギスを題に二句詠む。一句目はまだ江戸に來ぬホトトギスを待ちかねて山手の人を羨やみ、二句目は「鳴かぬホトトギス」を踏まえ、ホトトギスを待ちかねている気持ちを表している。二代目團十郎は日常のできごととは関係なく、しばしば詠んだ句を日記に記した。ここでも舞台初日の評判と二句の内容は関係しないだろう。

○今年 寺西佐左衛門殿成屋壺月病死

一 寺西佐左衛門殿 未詳。

二 成屋 未詳。

三 壺月 石川壺月の別名か。石川壺月は俳人、享保十九（一七三四）年四月二十六日没。貴志統沾洲の門弟。別姓崎山。編著に『江戸筏』。

二代目團十郎はしばしば演劇関係者や俳人の訃報を日記に書き留めた。（「第一回」正月二十四日他）。寺西佐左衛門は最賓客か。また成屋による早川伝五郎（享保四（一七一九）年没）追善句が二代目團十郎編追善俳諧集『父の恩』（享保十五（一七三〇）年刊）に掲載されているので、

壺月と同様俳諧または歌舞伎関係者か。

▽其角 古筆 是、「〇毛」はたちてよめぬ所有 やうくよめたり

木瓦の雨こそかはれ城の月 其角

一 古筆是はたちて「古筆毛バダチテ」（柿）、「古筆是たち（裁力）て」（老岩）、「古筆、これは足らで」（老博）

二 木瓦 『高安本』木嵐（老郡）

其角のこの句は二代目團十郎の日記にのみ記されている（『蕉門名家句集』八巻）。

▽今年 京淡に下り 江戸点者へあはず ちゃ／＼つけられて すゝきぢごんしの集を出し あんぎやと云て江戸をたつ 四月上旬歟三月下旬かたちし

一 京淡 「京の淡、淡々」（柿）、「淡々の誤りか」（老郡）。松木淡々、俳人延宝二（一六七四）年生、宝暦十一（一七六一）生没。通称伝七、別号渭北、因角、曲淵、三楊、半時庵など。江戸に出て立羽不角、榎本其角に学ぶ。のち京都、大坂で半時庵流という俳風で人気を集めた。伝授書を多く記し豪華な生活を送った。著書に『淡々発句集』『淡々文集』など。

二 あはず 「肌合があわず、の意か」（老郡）

- 三 ちやくく「ちやくく」〈老岩〉
- 四 ぢごんし「自言辞・慈眼視か。ぐずぐずいうこと」〈老郡〉
- 五 あんぎや「行脚」〈柿〉
- 六 たちし「立し」〈柿〉

俳人松木淡々はこの日記記載と同年、京都から江戸への旅を詠んだ俳諧集『紀行誹談二十歌仙』を編むが、「すゝきちごんしの集」と関係するかは未詳。

二代目團十郎は寛保二（一七四二）年、大坂佐渡島座に出演する際、淡々から息子三代目團十郎の死を悼み句（▽四月一日）や掛物（●同月十五日）を受ける。また同年五月二十四日「池庄方にて淡々亭主予を振舞取持……二十八年ふりにて逢ふ」（●）など、淡々との交流は長く続いていた。

○端午ノ初日太夫丹前ニテ予口上ニテシマフ少シ夜ニ入

- 一 太夫 市村座座元八代目市村羽左右衛門のこと（「第一回」正月二十七日参照）。
- 二 丹前 丹前物。歌舞伎舞踊のひとつ。元禄期、江戸の立役は「茶の湯丹前」「立髪丹前」「奴丹前」など、得意な舞踊を採り入れた演目をもっていた。

た。歌舞伎で初めて「丹前」を取り入れたのは多門庄左衛門（生没年不詳）とされるが、初代市川團十郎を「丹前開山」と記すものもある。

舞台の初日を祝う八代目市村羽左衛門の丹前や二代目團十郎の口上により、終演が遅くなった。歌舞伎興行は原則暮六つ（午後六時）までに終わらなければならず、遅れると役人から叱責される場合もあったが、今回それはなかったようだ。